

三角屋根の家から始まった
5人と7匹が暮らす岩永ビレッジ
エネルギーも食糧も自給自足を目指す
(長崎県・雲仙)



電柱9本が骨格になっている三角屋根の母屋。一辺5.4メートルの屋根、奥行きは6.3メートル。この家と隣にならぶ築場をつくった頃は、岩永さんはまだ独身。1階でろくろを廻していた。

20年をかけて、300坪の敷地に一家の住む場所を村をつくるように築いてきた岩永さんに、セルフビルドの気負いはない。「いまここでできることをやるだけです」。何をやればいいのかは自然がおしえてくれる、そういう生き方を全うしようとしている。

取材・文 堀口博子 撮影 三谷 浩



上/母屋は約10坪。入ってすぐにダイニング、キッチン、その奥は浴室。右手にはリビングが続く。狭いながら使い勝手よく考えられている。下右/母屋の西側に建て増した浴室。「足の伸ばせるお風呂が欲しい」、妻の由紀さんの希望で岩永さんが探し出した中古の大型バス。下左/肩幅ほどの梯子階段を上ると夫婦の寝室へ。子ども棟ができる数年前まで、ここで家族5人が寝起きしていたそうだ。

三角屋根の母屋

てしおに
Hand-built Houses
かける家

右/日当たりのいい表のベンチは洗いあげた皿やコップを乾かす絶好の場所になっている。中/母屋のドアは、解体で譲り受けた扉の上から斜めに木を張って、オリジナルに仕上げた。20年を経て朽ちた質感が美しい。左/薪ストーブの周囲に巡らせた柵にも年月が感じられる。冬はこのストーブ1台で朝まで暖かいそうだ。





右/初夏の雲仙の山中に咲くヤマボウシの白い花に因んで名づけた山ぼうし工房。木の曲がりやをそのまま生かした、木立を思わせる柱。時間をかけてゆっくり仕事を進める岩永さんの丁寧な眼差しが随所に通っている。
中/陶芸家である岩永さんのつくる使い心地のいい急須。由紀さんの山野草を写した手描きマットとともに。
左/岩永さんのつくる陶器の何ともいえない円みに惹かれる。芽吹きのかぐらみをイメージした花器が並ぶ。
下/石を積み上げてつくった階段が美しい。ハクがお昼寝中。

| 山ぼうし工房ギャラリー |

初窯の時に咲いた、ヤマボウシを工房の名にした。
ほんとうに山が白い帽子をかぶったようだった。
ヤマボウシはろくろの芯にも使う木。



下右/ギャラリーの入り口。左/建物の中央にある事務所。家族の歴史が貼ってある。実は、この壁の向かい側にはゲスト用の三段ベッドが配置されている。下左/南側は外光を取り入れるために八角形の半分の間取りに。ひとりで建てるため、大黒柱を軸に組み立てた自家製クレーンで丸太をつり上げながらつくったギャラリーは、工期約2年、会心の作だ。





上/夏空に、染色家の由紀さんが染め上げた藍布がはためく。かつてここが荒地だったとは思えないほど、人の手が落ち着きのある景観をつくり出した。下/半地下室のコーナー。積み木を重ねたような手仕事の温かさが伝わる流しスペース。右手はクローゼットのドア。木を斜めに貼ったのは意匠だけでなく「強度を出すため」。



上から。ギャラリーの半地下室へのドア。檜丸太の曲がり大胆に生かした梁。/半地下室の由紀さんのアトリエから雑木林を臨む。ここで由紀さん手づくりのおいしい昼食をご馳走になった。/焼物と交換して手に入れた建材用のぐり石を、ひとつひとつ積み上げるように手で貼ってつくった壁。「ものすごく時間がかかりました。修行のようでした」と岩永さん。/階東側のベランダからの眺め。鳥が運んだ種が雑木林をつくった。



夢を見る力。夢を見つづける力。
言葉ではなく、手を動かすことで、夢を語る人。

有明海を見下ろし、雲仙^{うんせん}を仰ぐ海拔
300メートルの高台、空は高く、大
地は大きく手を広げ、どこまでものび
てゆく。その真只中に、岩永一家の住
む「村」、山ぼうし工房はある。

住人は陶芸家の岩永隆治さん、染色
家の妻、由紀さん、高校1年の長男・
太郎君、中学2年の次男・太一君と小
学校5年の末っ子・太助君の一家5人
に、犬3匹と猫4匹。南北に長い30
0坪の敷地にこぢんまりとした建物が
西に3棟、東に4棟、道のような中庭
を挟んで立ち並んでいる。

西側は三角屋根の母屋、付属する物
置と染色室を兼用する洗濯小屋。窯場
と薪小屋、それとろくろ場。東側はギ
ャラリー、その後ろに来客用のパイオ
マストイレ。子ども棟。さらに温室。

それら建物と建物の間には、由紀さん
が丹誠込めて手入れしているハーブや
山野草が花を咲かせ、岩永さんが耕す
畑が点在している。その景色は、どこ
か絵本の中の空想の村を想わせる。

一家の生活は、道の両側を行ったり
来たりしながら、雨の日も、晴れの日
も、嵐の日も、何年に一度の雪の日も、
自然を暮らしの身近におきながら営ま
れる。たとえば子どもたちがご飯を食
べに母屋へ行く、そのほんのわずかな
間に犬や猫と挨拶を交わし、虫や花の
様子に目を留め、青く澄み渡った空を、
満点の星空を仰ぐ日々。

この愛すべき小さな「村」を岩永さ
んは、ギャラリーの屋根のトタン張り
とモルタル壁を除いて、たったひとり
でつくってしまった。草の生い茂る荒
れ地だった場所を、本来そこにあつた
はずの植物を少しずつ蘇らせながら、
20年をかけて、こつこつと、自らの夢
と家族の成長と人生の偶然を重ねなが
ら、手を動かし続け、現在の姿に実ら

せていった。

家族のはじまりは1988年8月8
日、長野県八ヶ岳西麓で開催された
「いのちの祭り'88」だった。反原発—
NONUKES、ONELOVEを
メッセージに、通称「88—ハチハチ」
といまも伝説的に語られる野外イベン
トに、全国からのべ8000人が集ま
り、会場となったスキー場は無数のテ
ントで埋め尽くされた。そこには喜多
郎や喜納昌吉ら、多くのミュージシャ
ンも参加していた。各テントからは煮
炊きの湯気が昇り、毎夜たき火を囲み、
ホビ・インディアンの物語に耳を傾け、
いのちのつながりを語り合いながら、
人々は8日間にわたる祭に酔いしれた
という。

そこに偶然居合わせた岩永さんと由紀
さんは、祭の熱い渦の中で魔法にかけ
られたように、会って1日で結婚を約
束した。それからわずか1カ月後の9
月、郷里の徳島からリュックひとつを
背負い、原付バイクに乗って北九州・

小倉の港に着いた花嫁を、岩永さんは
軽トラックで迎えた。

あまりにも速い人生の転換に、不安
と期待の混じり合う中で港に下りたっ
た由紀さん。「その時のタカさんの車
のナンバーが4971、ヨクナイなん
ですよ。大丈夫かな」と思いました
（笑）。しかし、三角屋根の赤い家から
始まった生活は、ワクワクするような
毎日。家も、食べるものも、エネルギ
ーも自分たちでつくる、夢に描いた手
づくりの暮らしだった。

そもそも岩永さんは20年前、まだ由
紀さんと出会う前、ものづくりの仲間
たちと芸術家村をつくらうとこの土地
を借りたのだそう。

「エンジニアだったんですが、世界を
見たくてヨーロッパへ。途中インドで
留まってしまい計1年半ほど放浪しま
した。それで人生変わってしまった」。
そして帰国、山で暮らすために陶芸家
を目指し、雲仙へ戻った。



左/土の上を四つん這いになって、建築現場の木っ端を玩具に育ったという息子3人。「初めてここへ来た時と比べると周囲の風景もずいぶんよくなりました。子どもたちに囲まれて、今がいちばん満たされていると思います」と話す岩永さん。右上/地元の仲間と結成したジャンベグループ「パラドゥドゥ・カン」、意味は「場所の音」。今も岩永さんの胸に、〈いのちの祭り〉のリズムが響いている。右中/山ぼうし工房から有明海を一望。右下/庭のハーブを加え淹れた午後のお茶。



アフリカの楽器、ジャンベの音が、岩永ビレッジをめぐる、空に吸い込まれていく。自然体の家は、大きな夕焼けにつつまれた。

しかし芸術家村構想は頓挫、「結局誰も来なかったんです(笑)」。三角屋根の家を、自分の住まい兼創作の場としてつくり、由紀さんを迎えるためにリフォーム、家族の住み家となった。「Aフレームの家なら早く簡単につくれると聞いていたのですが、実際つくってみると三角の家はそんなに簡単ではなかったですね」

材料は、偶然手に入った電柱だった。「山中で使われなくなった電柱があるということを知り、九州電力から電柱9本を買い受け、その内6本でA型のフレームをつくり、3本は梁に使いました。土台はコンクリートの電柱を切断して利用しました」

岩永さんの家づくりは、手に入った部材に合わせて、建物の大きさを決めることも多い。その時その時の必要に応じてつくりなおしたり建て増しをしている。使う材料は、すべて偶然手に入ったもので建てるといって、セルフビルダーの極意が貫かれている。

現在、岩永家の電力は窯場から薪小屋、ろくろ場の屋根一面に取り付けられた太陽光パネルによる太陽光発電で50パーセントが賄われている。以前は90パーセント以上の自給率だったが、子どもたちが大きくなるにつれ、建物が増えるにつれ、使用電力も増えたか

ら、と夫妻は苦笑する。

水は、飲み水以外は雨水を利用して。地下に埋めたドラム缶12個分の雨水で洗濯、トイレ、庭の散水を賄っている。またバイオマストイレからは無臭の液肥がとれ、畑、庭木、雑木林を肥やしている。発生するメタンガスは、熱エネルギーとして日常的に使うには不十分だが、ギャラリを訪ねたお客さんにお茶を淹れるために利用している。ここに、岩永さんが山ぼうし工房の暮らしをとおして人々に伝えた思いをそっとこめている。「エネルギーは身近でつくることができる」ことを、言葉ではなく行動で示そうとしているのだ。

「バイオマスをうまく使えば、牛糞や鶏糞のニオイやハエもなくなるばかりか、エネルギーに変えられるんですけど……」と、周囲にある牛舎から飛んで来るハエを追いやりながらつぶやく。

「次の計画ですか? 食糧の自給自足を目指したいですね。雨水や排水を浄化して水を循環させ森の中にビオトープをつくれれば、生物の多様性は広がります。敷地内に水田もつくってみたい。でも、食がいちばん難しい、ハードルは高そうですね」

その一方で、岩永さんは建物を縮小していくことも考えているという。





今でこそ四季の草花に彩られた岩永ビレッジだが、由紀さんが来た頃は「あたり一面ネコじゃらしの草が生えて、その中にぼつんと三角屋根の家と窯小屋があるだけだった」。でも「希望に胸膨らむ赤い家だった」と当時を振り返る。右/結婚したばかりの頃の夫妻。左/まだ太助くんが生まれる前の写真。



ギャラリー棟裏に併設しているバイオマストイレ。仕組みを学び、独自の方法でつくり上げた。材料はすべて既製建材の転用。地下に埋め込んだタンクはヒューム管。臭いもなく、完全循環するトイレから知るエコロジーはわかりやすい。



バイオマストイレ



育苗温室

不要になった温室を貰い受け、育苗室に活用。冬は植物の越冬に欠かせない。岩永家では不要品が宝となって生き返る。



「形あるものはいずれなくなります。手を入れるのもだんだん重荷になってくる。最後はまた、20年前のように1軒だけになっていくんじゃないでしょうか。それでいいと思います」
ところで、こんな暮らし方は子どもたちにどんな影響を与えているのだろうか。由紀さんはこう語ってくれた。
「生まれて間もなく土の上を這いずり回っているからかもしれないませんが、太郎が2歳で入院した時に、退院して家へ帰るなり土に頬ずりするんですよ、これにはもうびつくりしました(笑)。どの子も自然や動物に対する感受性がとても強いですね。親には何も言いま

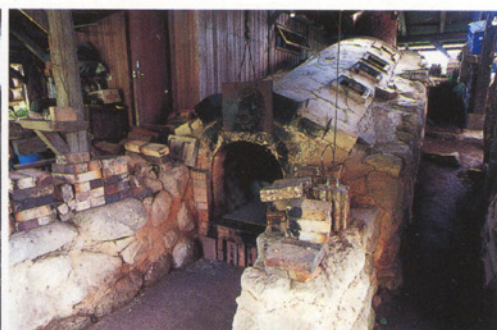
せんが、学校の課題に農業や環境問題を選んでいくようです」
ちよつと風変わりな親の背中を見て育った3人息子は、一般世間と家との違いに戸惑いながらも、自分らしく受けとめ、たくましく、真つ直ぐに成長している。
そんな岩永さんの家族の住む「村」の10年後は、果たしてどんな風景になっているのだろうか。子どもたちが独立して、隣りに家を建てて暮らしているかもしれないですよ、と水を向けると、「そうですね。でもあまり期待はしていませんよ」と言いながらも、岩永さんはうれしそうに笑っていた。

DATA

岩永邸・山ぼうし工房
長崎県雲仙市瑞穂町西郷丁1-517
敷地面積 300坪+森林300坪
三角屋根の母屋
竣工1988年5月、工期約2年
窯とろくろ場
竣工1988年6月、工期約4カ月

育苗温室

竣工1991年3月、工期約1週間
山ぼうし工房ギャラリー
竣工2000年3月、工期約8年
(現在も一部工事中)
バイオマストイレ
竣工2001年1月、工期約3カ月
子ども棟
竣工2004年10月、工期約6カ月



窯とろくろ場

右上/屋久島で陶芸を学んだという岩永さんは、最初に穴窯をつくった。右下/窯の裏の薪置場。中/ろくろ場。床を上げ、天井高を低くとした間取りが落ち着く。三和土は、砂と貝灰と敷地から取った赤土をまぜた。左/ろくろ場から中庭を見る。

子ども棟

右/雑木の森に面して建てた子ども棟は、後々ゲストハウスにしようと別荘風の小屋にした。前に畑を配し、トマトやキュウリの茂る食べられる庭に。左上/タブの木を遊び場に、たくましく成長した息子たち。左中/寝室の中2階に小窓を設け、通風をいちばんに考えて設計した。柱は隣地から伐採した檜丸太、床は檜、壁と天井は杉。左下/森側の窓から入り口を見る。窓にレリーフフェンスのあるインドネシア製の中古の鉄の窓枠をはめている。

